

七夕考

これを書いているのは、7月4日。世間は七夕に向けての動きがあつてしかるべし、ではあるものの、近年「笹の葉」に短冊が認められた様子は見られないし、そもそも「笹の葉」すら見られなくなってきた。あるところにはあるのであろうが、全く見えない。

それは、多分自分の活動域の狭さがその要因であると思うのであるが、立ち回りのスーパー複数軒でもその傾向が見られることから、やはり七夕の因習はどうやら消滅しそうであるし、盛り上げようとか、復活させようという機運の盛り上がりは感じられない。

原因は明らかであるが「それを言ったらお終いだ」となるから書かないが、少子高齢化の折、この良き風習が絶滅してしまわないように微力ながら応援しようではないか。

七夕とは五節供の一つ。では、七夕の行事は何か。一言で言えば、笹（竹葉）に吹き流しや網飾り等の様々な飾りを付け、メインは五色の短冊に七夕に関する「おりひめ」「ひこぼし」等を書き、各自1枚だけ願い事を認める（ローカルルールか？）ことが概ねの定義となるのであろう。

そう言えば昔、文房具店にこの時期になると「七夕セット」なるものが売られ、それを（自分も）利用し、子供がいる玄関先（我が家も）には立てかけられていた。どんな願い事を書いたのかは、もうすっかり忘れてしまった。きっとその願いが叶わなかったことから、少しは努力しなければならぬことを学習したはずであろうが、それも忘れた。

振り返って今の自分はどうかと問われれば、願い事は1枚どころか、5枚では足らず、あれこれと正直にかつ丁寧に明らかにすれば、108枚は軽く越えるかも知れない。108の数は言うまでもなく、煩惱の数に由来するのであるが、それを軽く越えるのであるから、神様仏様も呆れるはずに違いない。

「七夕 願い事」で検索してみた。傑作が多い中、「私の願い事だけ叶いますよーに」とか「おじいちゃんがカエルになりますように」とのシュールな願い事もあった。また、「PPK」とだけ書かれたものもあった。多分ピンピンコロリの意味であろうが、誰がの主語がないから少し恐ろしい。もし仮に「ウチの夫が」とか「私が」があつても、何れにしても長患いで家族が苦勞させられることは、そこだけに焦点を当てても不幸である。つまり誰にも訪れる「不幸＝死」をよく噛みしめた含蓄ある「願い事」なのかも知れない。

人生の後半を歩んでいる当筆者にとって、「PPK」の願い事は現実を直視せざるを得ない状況を噛みしめさせられた教訓の様に映った。川の畔へは確実に近づいている。

短冊に「みんな読んでくれ」と書こうとしたが、当文の公開予定日は旧暦の七夕の前々日。読者に読まれなかったらそれまで。それで今日は7月4日。もうよくわからん。